

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：32511

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885077

研究課題名(和文) 戦争記憶空間における継承・教育メディア論の学際的実証的研究

研究課題名(英文) Interdisciplinary Empirical Study of Inheritance and Educational Media Theory in War Memorial Space

研究代表者

高橋 舞 (TAKAHASHI, Mai)

帝京平成大学・ヒューマンケア学部・講師

研究者番号：50735719

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、史資料研究および沖縄と韓国におけるフィールド調査研究を通して、戦争記憶空間が有効な継承・教育メディアになりうる条件および教育的援助の在り方を解明することにある。研究成果としては、次の2点が導き出された。「戦争の記憶」が「われわれ」と「彼ら」という人々の思考に暗黙に引かれた境界線をまたぎ越す形で継承されるときに、共生知として体得される。境界線のまたぎ越しは、ナショナルメモリーの継承内容から排除される「不在の人々」想起によってもたらされる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is, through historical materials research and field research in Okinawa and South Korea, to clarify the conditions and modalities of educational support to war memorial space can become a valid inheritance and educational media. Research as the results, the following two points have been derived. (1) "Memories of war" will be much realized as the wisdom of "Living Together", when we cross the unconscious border between "we" and "they". (2) "Border crossing" will be provided by reminding "absence" who are eliminated from the inherited national memory.

研究分野：社会科学

キーワード：戦争の記憶 戦争記憶空間 世代継承 教育メディア 不在の人々 教育人間学

## 1. 研究開始当初の背景

戦争被体験者不在時代の到来を目前に控え、「戦争の記憶」の継承をいかに継続させるのが喫緊の課題となっている。その際重要な観点は、教育効果を引き出すメディア研究といえる。ここでいうメディアとは、継承する文化内容および継承の際に用いられる道具や方法を指す。国外においては歴史学者 Michael Jeismann など、「ナチスによる虐殺」などの「戦争の記憶」を扱う研究者によって、母語の異なりやリテラシーによって継承者を限定する言語メディアを超える可能性を有する継承・教育メディアとして、戦争遺跡・モニュメント・歴史館といった戦争記憶空間を対象とする研究が盛んに行われている。国内では、京都大学・岡真理氏や元沖縄大学・故屋嘉比収氏、東京学芸大学・君塚仁彦氏など思想、歴史、博物館学者を中心に議論が深められ、第 24 回日本ドイツ学会総会（2008 年 6 月、筑波大学）など、諸学会においてシンポジウムテーマにも取り上げられている。このように国内外で深化を見ている戦争記憶空間における継承・教育メディア論であるが、教育学の領域においては、修学旅行を含む特別活動や人権・平和教育といった教育実践領域では戦争記憶空間が対象化されるものの、継承・教育メディアの視点は深められていない。他方、国内の教育思想・哲学領域では、メディア研究が日本女子大学の今井康雄氏らにより先導的に展開されているが、言語メディア中心かつ世代継承のメディアに関する考察が不十分と指摘されている。本研究と問題意識を共有すると考えられる研究としては、京都大学の山名淳氏（山名淳著「記憶空間の戦後と教育 - 広島平和記念公園について - 」『教育と政治 戦後教育史を読みなおす』勁草書房、2003 年）を中心とした戦争記憶空間論研究が挙げられる。氏らの研究は、広島やドイツにおける戦争記憶空間を教育メディアと捉え、その教育学的意義

や課題を抽出しており、「戦争の記憶」を継承する教育実践方法創出にむけた萌芽的研究と考えられるが、これらは 2000 年代前半に提示されて以降、進展を見ていない。

以上のことから、被害者側と加害者側が存在する「戦争の記憶」というものに対し、真に戦争に抵抗する「戦争の記憶」を継承するための教育メディア論研究の深化が、今求められていると言える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、戦争記憶空間を有力な継承・教育メディアの一つとして位置付け、戦争記憶空間が有効な継承・教育メディアになりうる条件とともに、それらが効果を発揮するための教育的援助の在り方を解明することにある。

## 3. 研究の方法

本研究では、具体的・臨床的な教育実践理論創出を目指し、史資料研究とフィールド調査研究（非参与観察・参与観察・インタビュー調査）とを組み合わせた手法を用いる。

また、本研究では、沖縄と韓国における戦争記憶空間を、フィールド調査対象地とする。

被害を与えられた場からの継承では、被害を与えた側を「敵」として創出する（ヤイスマン）効果が発揮されやすいと予想されるが、アジア太平洋戦争で国内唯一の市民の住む場所が戦場となった沖縄は、その被害が日本軍、同県民からもたらされた、被害・加害が複雑に織り交ざった場である。ゆえに、被害地でありながら容易には「敵」の創出を許さず、戦争に抵抗する戦争記憶空間の条件を豊富に持つと予想される。

また、植民地支配を広く展開した日本における「戦争の記憶」継承には、日本が被害を与えた場における継承の在り方が問われなければならない。韓国は、とりわけ多くの被害と憎しみの記憶を生じさせてしまった場であり、このような戦争に抵抗する「戦争の

記憶」を共有することに困難を伴う場で、東アジア全体で共有できる記憶継承の在り方が鍛えられる必要がある。

このように、被害地からの「記憶の継承」と加害地からの「記憶の継承」の在り方を抽出することで、東アジア全体で共有できる、真に戦争に抵抗することに貢献する、「戦争の記憶」における継承の正常化に貢献する教育メディア論を創出できると考えられる。

また、本研究では、戦争記憶空間（沖縄）を修学旅行とする神奈川県立秦野高等学校他1校へのフィールドワークも実施する。実際の学校教育における「戦争の記憶」継承の教育実践から、「戦争の記憶」継承の教育的援助の在り方抽出を補強できると考えられるからである。

#### 4. 研究成果

##### (1) 史資料研究

史資料研究は、戦争記憶空間のメディア研究が充実している思想・歴史・博物館学など多領域にわたる先行研究分析を行った。継承原理導出にあたっては、ベネディクト・アンダーソン、ハンナ・アレントなどの思想を中心に検討したほか、本研究では、沖縄と韓国をフィールドワーク対象地としたためこの戦争記憶空間特有の特徴を明らかにするために、屋嘉比収や鹿野政直、富山一郎、高橋哲也など、沖縄や韓国に焦点化した戦争記憶空間論を展開している思想家、歴史家による先行研究の分析を行った。ただし、本研究が中心的に問題対象化してきたのが、名もなき民衆の戦争の記憶の継承可能性であったこともあり、論文化、書籍化された先行研究には限界もあり（例：沖縄で戦没した朝鮮人軍夫や日本人や韓国から来た従軍慰安婦の戦争の記憶など）、こうした戦争の記憶継承の可能性を探るために、沖縄新報などの新聞記事や博物館資料などを分析対象とした。

これらの史資料研究によって、戦跡や慰霊

碑、戦争歴史館などの戦争記憶空間は空間化される際に、むしろ戦争を可能にする人間形成の効果を発揮する教育メディアとして機能しやすくなること、またその際の戦争記憶空間化は、一人ひとり異なるはずの戦争の記憶が、大きな一つの物語、すなわちナショナルメモリーとし回収される形で空間化される傾向があることが明らかになった。

##### (2) フィールド調査研究

本研究が、韓国における主要なフィールド先であるナムの家「日本軍「慰安婦」歴史館」の大規模な改修工事期間にあたり、かつ工事トラブルによってリニューアルオープンがさらに予定よりも大幅に延期されたことにより、26年度の研究開始時期から27年前半は、沖縄県立平和祈念資料館を中心とした沖縄フィールド調査研究を実施し、韓国のフィールド調査研究は、27年度12月から年度末にかけて実施した。

また、学校へのフィールドワークに関しては、2校の協力校の修学旅行時期に合わせて、26年度秋季に、沖縄県への修学旅行が実施されている神奈川県立秦野高等学校へ、27年度春季に、広島県への修学旅行が実施されている神奈川県立秦野市立鶴巻中学校へのフィールド調査研究をそれぞれ集中的に実施した。

これらの調査研究によって、継承可能性が、継承対象が固有の人間であるという唯一性・身体性と連動する際に高まるという、岡部美香による科学研究（挑戦的萌芽研究：23653254）で明らかにされた点が再確認された。特に、沖縄を修学旅行先としている秦野高等学校の事後成果物分析からは、民泊などによる地元民衆との触れ合いが、歴史館や博物館見学以上の教育メディア効果を発揮した可能性が見いだされ、戦争体験者不在時代を迎えようとしているこれからの戦争の記憶継承においては、証言映像をとり歴史館で

表象するなどの、身体と連動した形での記憶を遺していく作業努力とともに、学校教員を含め、一見すると身体と連動しているとは思えないような文書記録などのモノやコトからも唯一の死者が想起されてくるような、モノやコトと身体とを繋ぐ「仲介者」の存在を見出していき、教育メディアとしての条件や機能を追究していく点も重視されていく必要があると思われる。その際重要になるのは、記憶継承が戦争に抵抗する形になるためには、死者の想起が、かつ複数性・多様性を有していなければならない点である。(1)で明らかになったように、単なる一つの象徴的な死者との出会いのみで戦争の記憶を継承したと考えるならば、戦争の記憶継承を一つのストーリー化すること、すなわちナショナルメモリー化することと同じで、「われわれ」と「彼ら」を分断し「敵」を想像させる記憶継承になりかねないからである。戦争に抵抗する戦争の記憶継承において、今後の課題となるのは、仲介者を含め戦争記憶空間が、いかに複数の多様な戦争の記憶を遺し、その教育メディア効果をあげるかということになる。

### (3) 研究成果まとめと今後の課題

(1)の史資料研究と(2)のフィールドワーク調査研究を通して明らかになった点は、以下の2点にまとめられる。

複数性・多様性としての戦争の記憶が、「われわれ」と「彼ら」という人々の思考に暗黙に引かれた境界線をまたぎ越す形で継承されるときに、共生知として体得される。

境界線のまたぎ越しは、ナショナルメモリーの継承内容から排除される「不在の人々」想起によってもたらされる。

本研究で導出された以上の研究成果に関

して、研究協力をいただいた歴史館や学校にはそれぞれ報告書を作成し報告を行い、教育実践現場への研究成果の普及に努めた。とくに沖縄県平和祈念資料館からは、館内の展示や今後の展示表象方法および普及活動の理論的基盤を得たと評価をいただき、教育実践への貢献という本研究の目的に、一定の成果をあげられたと考える。

ただし、韓国のフィールド調査が最終年度末まで実施できなかったため、日韓の戦争記憶空間の比較研究には至らなかった。したがって、日韓の戦争記憶空間における戦争の記憶継承課題の共通点や差異を明らかにし、東アジア全体で共有できる共生知としての戦争の記憶継承の実践理論を具体的に展開していくことが今後の課題となる。

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

高橋舞「誰の「戦争の記憶」を継承するのか 戦争記憶空間が戦争に抵抗するメディアとして機能する条件」、教育哲学会第58回大会、2015年10月11日、奈良女子大学(奈良県奈良市)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

高橋 舞 (TAKAHASHI, Mai)

帝京平成大学・ヒューマンケア学部・講師  
研究者番号：50735719